

ACEs（逆境的小児期体験）の及ぼす影響とTIC（トラウマインフォームドケア）の取り組み

～トラウマセンシティブスクールを目指して～

社会システム研究科 地域コミュニティ専攻 2024M30001 大石 柳

要旨

米国において、逆境的小児期体験により18歳までの虐待によるトラウマや家族の機能不全等のACEsの影響がその後の心身の健康を害し、不適切な対人関係や社会的な問題行動等となる要因となっていることが示され、我が国においても、SAMHSA（Substance Abuse and Mental Health Services Administration）（2014）が示すような、小児期のトラウマを理解してかかわるトラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care：以下、TIC）の重要性が指摘されている（亀岡、2019；野坂、2019）。

実際、筆者の学校にも逆境的小児期体験による様々な傷つき、トラウマを抱えて学校生活を送っている生徒も少なくないことを日々痛感している。

ACEsの累積する環境で育った生徒は、攻撃性や衝動性、心身の不調、自己否定的言動など様々な気になる特徴が現れる。幼児期に家庭内暴力や面前DV、身体的な虐待やネグレクトといった慢性的なトラウマ体験にさらされて愛着の形成に失敗すると、感情を抑えることができず暴力的なまでの情動の爆発や、自己破壊的な行動をもたらすこともある。過食やリストカットなどの自傷行為、大量服薬などの問題行動で感情を調節しようとする生徒も多い。また、発達障害の問題が基盤にある生徒でも、発達障害の問題だけが単独で表れている事例は少数であり、発達障害と児童虐待などのACEsの問題が重複している生徒も少なくないと考えられる。

子どもたちにとって、学校が安全で安心して過ごせる場所であることは必要不可欠であり、教員がトラウマへの理解を深め子どもたちの問題行動の背景を考える際に「トラウマ」という視点を導入することは「学校全体を安全で安心な場所にする」というTICの基本につながると考える。逆境体験が背景にあると推測される子どもへの適切な支援として、TIC概念に基づく支援を展開していくことが求められると言えよう。

2. 本研究の目的

本研究の目的は以下の通りである。

（1）ACEsの及ぼす影響への理解と援助と、TICに関する先行研究・先行実践をまとめ、学校現場に導入する際の課題と留意点を明らかにすること。

（2）全ての生徒の安心・安全感を高めることにつながるTSSの実現に向けて、発達支持的生徒指導としての「魅力ある学校づくり」を進めると同時に、課題予防的・困難課題対応的生徒指導について、生徒がお互いの個性や多様性を認め合い、安心して授業や学校生活が送れるような風土を生徒たちがつくり上げていくための支援の課題を提起していくこと。

（3）筆者の学校の生徒の事例を、虐待的な養育環境やマリトリートメント、子どもの発達特性の観点から整理し、関係諸機関とも連携した支援の課題を考察していくこと。

（4）発達障害の特性をもち、トラウマの問題も抱える子どもたちへの理解が深めることを通して、学校での様々な問題事象への対処能力を高め、生徒の特別なニーズに対する合理的配慮に必要な対話を行っていくための課題を検討していくこと。

（5）教員がトラウマを理解した適切な対応の在り方を学習するための、TIC（TSS）に関する教職員研

修プログラムを作成し、実践していくこと。

本論文の第1部ではTSSの実現に向けての先行研究・先行実践を整理した。

まず第1章では、ACEsの及ぼす影響に関する先行研究を紹介し、複雑性PTSDの問題が生じる場合も少なくないことを指摘した。それと同時にACEsによる否定的な影響を軽減し、子ども・人々のレジリエンスを高める要因として、PACEs(保護的・補償的体験)についても紹介し、学校教育でPACEsとなる体験を保障していくことの重要性についても提起した。

第2章では発達障害の子どもがトラウマを受けやすい原因を亀岡らの知見を踏まえて整理し、学校教育においても発達障害とトラウマとの密接な関連を理解した支援が求められていることを指摘した。

第3章ではアメリカから始まったTICの考え方について整理し、医療や福祉領域だけでなく、多くのACEs体験をもつ子どもと関わる教育領域でも大切な考え方であることを提起した。

第4章では、学校教育の中でTICの考え方を実現するTSSの取り組みについて、中村らの提起を中心に紹介した。

これらの先行研究を受けて、第2部では多くのACEs、また発達障害とトラウマの重複を抱えた子どもが在籍している筆者の高校におけるTSSの取り組みの現状と課題について整理した。

第1章では本校におけるTSSの取り組みの課題を生徒指導提要で示されている生徒指導の4層構造(発達支援的生徒指導、課題未然防止教育、課題早期発見対応、困難課題対応的生徒指導)と関連づけながら整理を試みた。

また、第2章では困難課題対応的生徒指導の事例について、ACEsの累積を抱える生徒の事例と、発達障害と小児期逆境体験の重複事例を紹介し、どのような関係諸機関との連携の中での取り組みが求められているのか、その具体的な課題を整理した。

本校におけるTSSの今後の課題としては、以下のようなことが挙げられる。

(1) トラウマ、デートDV、虐待、性暴力などの誤った認識や行動、またそれらが及ぼす影響などを正しく理解し、ACEsをもつ子どもの課題未然防止教育となるよう、生徒向けの研修をHRや総合学習での学びと関連づけながら展開していく取り組みの推進。

(2) TSSの実現に向け、また課題早期発見対応の学校における取り組みとして、本年度提起した研修内容をさらに発展させる研修を継続していくこと。具体的には以下のような課題があげられる。生徒研修と同じくトラウマ、デートDV、虐待、性暴力などの誤った認識や行動、それらが及ぼす影響などの理解。またそれらを背景にもつ生徒の事例研究とTICの視点での生徒対応の在り方。

(3) 第2部第3章で紹介したような困難課題事例に対する対応能力をさらに高める必要がある。事例会議を開き関係機関と連携することを、養護教諭や特別支援コーディネーターが中心に実施しているが、緊急事案としてあがってくるのが遅かったり、担任や授業担当者の意識や対応にかなりの温度差があるのが現状である。ケースによって誰がどう支援に入るのか、フローチャートの作成など組織体制の構築によって組織的対応力の一層の向上を図る必要がある。